

## 台湾探訪記

植松 明石

一、十数年前から台湾北部の丁村（客家の村）の宗教と社会に関する研究調査をする機会に恵まれ、以後現在まで毎年調査を続行し、村の方々より非常に多くの教示をいただてきた。客家は中国語方言のひとつ客家語を話す人々で、故地は遠く中原にさかのぼるとされる。それが次第に南遷し、華南の広東省東北部、福建省西部を居住地とするようになった。中国人による台湾の開拓移住は、はじめ福建系の人々によってすすめられ（閩南語を話す）、客家はそれより少し遅く移住してきたのである。丁村のある新竹県は、隣接する桃園県、苗栗県と共に客家の多い地域であり、独自の生活文化を保持するとされる。

私は丁村の張さんの家に主としてお世話になり調査を続けてきた。張さんは、この近くにある大きな廟の所有する

水田の小作農民で、初めの頃は張さん夫婦、二男夫婦とその子ども五人、四男、婚出した三女（夫が単身赴任中）とその子という十二人家族であった。息子はすべてサラリーマンで、農業は主として張さんがやっていた。しかし数年して張さん夫婦は相ついで死亡、その後種々の事情で、現在は二男夫婦と、その子四人の六人家族である。農業は二男夫婦が会社勤務のかたわらたずさわる兼業農家である。

家屋は地主から小作農民に与えられる古い日干煉瓦の建物の一部であった。私はその中の一室を使うことになり、そこを根じろに種々調査にはげむことになった。親切な張さんにつれられて、ある時は結婚式に、ある時は廟の祭りに、年中行事の数々に参加させていただき、その都度村の多くの人々と親しくなり、理解を深め、それぞれが忘れが

たい一人一人となっている。

丁村調査中、種々のことに遭遇したが、葬儀は殊に印象深い。春休みの二月、三月の頃出かけることが多かったがその時、必ずのように葬儀にぶつかった。葬儀を観察調査することは悲しみの場であるのでむずかしい。はじめおそるおそるといふふうであったが、次第に訃を聞けばすぐかけつけるというようになった。それは私のような外国人のよそ者が参加するということは、むしろ葬儀を盛大にすることに不承不覚という感じがわかつたからである。そして次第に葬儀を観察調査するだけでなく、準備を手伝った(式場にさげる弔旗にはる弔文を墨書する)、ある時は死者の生前の功を称える弔辞を作り、告別式の時読みあげる(これは葬家からも参列者からも非常によく驚いた)、死者に酒を献ずる役をひきうけたりするようになり、参与観察の方法が自然にととのい、理解を深めることができたのは有難いことであつた。

死者に関する儀礼は長期にわたる。それは死者を埋葬すれば儀礼が終了するのではなく、数年して死者を掘り出し、骨をきれいにしてカメに入れ、再び墓に納めるといふ複製制をとっているからである。こうした方法は、台湾漢人社会に一般にみられるものであり、また日本でも奄美、沖縄で一般的な葬法である。沖縄の歴史的経緯からして沖縄の複製制が中国文化の影響、特に南部中国の葬法との関連の

有無が、これまでさまざまに論議されてきたのである。私も沖縄の葬儀はしばしば見てきたので、丁村の葬儀は非常に興味深く種々考察を重ねることができた。

二、丁村において望ましい死者の資格は、成人以上で、なるべく老年、配偶者があり、祭祀継承者として父系の男子がいること、そして自分の家の正庁(家屋の中心にある神々や位牌をまつる祭壇のある公的部屋)の土間で死を迎えることである。だから人々が旅先や病院で死を迎えることが非常に不幸なことになるので、病気が重くなると急いで家に帰らなければならぬ。また自家で危篤になつても自分の寝台で死を迎えてはならず、その時期になると、正庁の土間に敷物をしき、そこに移される。男はむかつて右女は向かつて左、頭は祭壇方向とその位置もきまつている。このような正常な死を迎えた人は、祖先となつて、子孫に祭祀され、また子孫を守護する存在となるのである。死者は寿衣とよばれる死者の衣服を着るが、これは六十一歳の誕生日、或は病気が重くなつた時などに、婚出した娘たちが贈ることになつている。また指輪やイヤリングなどの貴金属もおくられる。私がお世話になつた張家のおばさんも病が重くなつた時、寿衣やイヤリングを婚出した娘三人からおくられたが、これを身につけ木棺の中に納められたのであつた。

このように死前後の儀礼のありようをみると、死を如何にむかえるべきかという形が非常にととのっているように思われる。張さんは死の直前に、自分の入る木棺は七〇〇元位（これは安価な方の棺だ）のを買うように遺言している。人は当然死ぬべき存在であるが、人の生涯を死後を含める一体として考えることがごく自然なのであった。

三、祖先になることが、人にとって必要な望ましい地位であり、それにふさわしいプロセスがきまっているように、祖先になれない死者についてもきまっている。祖先になれない死者は災をもたらず鬼魂、孤魂としておそれられる存在となる。このため鬼魂に対する儀礼が頻繁におこなわれる。祖先になれない死者として一番問題になるのは未婚の女性である。女性は必ず婚出して、夫と共に夫方の位牌に夫の配偶者としてまつられることになっていて、出生の家の祭壇でまつられることはない。これに似たことは沖繩にもあり、未婚女性の位牌が裏部屋にひそかに祀られたりしている状況と通ずるところがある。未婚女性の葬式はごく簡単で、週忌もおこなわず、墓に鍋や米、薪などを置いて死者にこれで自炊しなさいというのだという。多くは埋葬されたままで、拾骨はおこなわねれず、そのまま忘れさられるか、火葬にされ遺骨を寺にあづける場合もある。寺にとつて遺骨をあずかることは収入の方法でもあるから、多

くの寺で納骨塔その他の施設をもっている、また死後に夫を求めて死後結婚をすることもあった。

夫と共に位牌にまつられる女性であっても通常夫の姓名のらず、出生の姓を名のり続ける。女性は位牌上の夫のからわらに出生の〇氏とのみ書かれ個人としての名は書かれないのが普通である。姓は日本における意味とは異なり、単なる区別のための記号ではなく、先祖を共にする血縁集団のメンバーであることをあらわしている。だから女性はずっと血縁集団のメンバーシップを持ち続けていることになる。しかし婚出することを女性のすべき姿と考えている人々にとつて、やがて居なくなる娘は、子供の数には数えられないつまらない存在と思われているのも事実である。それなのに一方、かつて養女をしばしばもらっている。労働力の問題もあるが、重要なのは娘ではなく配偶者としての女性なのである。女性の位置の問題は複雑であり、事実にもとづく様々の考察を必要とするのである。

一方、葬儀に際し、婚出女性には種々の役割がある。すでに述べたように父母に対し、死亡の以前から寿衣や貴金属の贈り手となっているのだが、父母の死を聞くと直ちに家にかけてつけるが、帰るにあたり家から少し離れた道路のあたりより号哭しながら家に入らねばならない。これを聞いて家にいる遺族たちも共にまた号哭するのである。哭くのは孝行心の表現であり、葬儀の中でも度々哭く場面があ

る。他の福建系の村の葬儀に参加した時、ここでは泣女が雇われ、マイク片手に哭き続けるのを見た。J村では泣女をやとうことはみられない。

また婚出女性は高額の供物を供え、多彩な死者用の儀礼用品（死者用の紙製霊屋、驕、紙浅箱、等）を贈り、葬儀をもちあげる音楽隊（伝統音楽や洋式音楽など）を雇う。これらが多い程葬儀は盛大となる。場合によってはエレクトーン車を参加させることもあり、思いがけない日本のなつかしのメロディーが葬儀場一杯に流れて驚かされることもある。葬儀は静粛なものではなく孝行心のあらわれとして賑やかにしてある時は巨大な音のかたまりとなる。

更に重要な娘の役目として死者の靈魂を墓地から三日間家に導く送火の担当者になることがある。知人のKさんは娘がないためまわりからしばしば娘をもらってはどうかとすすめられていた。結局息子の妻に送火をやってもらうかと娘をもらうことしなかったが、それほど重要な役目なのかと驚かされた。また、婚出した娘たちは、葬儀後おこなわれる七回の週忌のうち、四番目の週忌を分担することになっている。孝行心のあらわれなのである。

四、葬儀の中で殊に珍しかったのは做功德という和尚による供養儀礼である。和尚といっても寺の僧ではなく、街で壇を聞く道士の一種である。彼らの知識は浅く、儀礼を

演ずることはできても、それを説明することは殆ど困難という状態であった。

儀礼の節目の数は支払われる金額によるが、J村での葬儀の殆どは、夜から翌朝にかけておこなわれる簡単とされるものであるが、それでも請神、請祖公、請亡魂、沐浴、十王懺、打地獄、打血盆、過奈何橋などなどの様々が演ぜられる。この儀礼は死者を安置した正庁前の庭に天幕をはり、そこにもうけられた祭壇を中心におこなわれる。祭壇の壁面には、三宝仏画、十殿閻羅図、地獄図などがかざられ、鐘、太鼓、笛などによって音楽を奏しながら、衣裳をつけた和尚らが経をよみ、跳舞し、物語を演技するのである。その間、遺族も指示にしたがって歩いたり、ひざまずいたり、拝々したり、泣いたりする。例えば打地獄、打血盆は、土間に砂や玉子、紙などで象徴的に作られた地獄から死者が救い出される様子を、十王懺は十殿の閻摩王の前を死者がひき出され、無事通過する様、過奈何橋は、二箇のテーブルの間に長い布をわたして橋にみたくて、その上を籠に乗せられた死者の霊が無事に地獄の橋をすうっと渡るところ、そして無事渡り終えても一同泣くというふうに、わかり易く、時に面白く、時々低俗な演技が、くりひろげられる。夜も更けてあたりは真暗くしずまっても、天幕の中だけが異様に明るく音楽や読経のこだます中を和尚と遺族による功德の儀礼は続けられる。しかし次第に遺族も疲

れて、参加する人数も少なくなり、ある時は観察している私のみということもあつたりする。

和尚の社会的地位は低い。彼らは一般に街にすみ、妻帯してふだんはシャツを来て暮し普通の人とは何もかわるところがない。

五、葬儀には多額の費用が必要で、その中心は棺代、和尚らへの謝礼と特に飲食費である。飲食費は香儀をもってきた家の家族全員に二日にわたって飲食をふるまうのであるから大変である。張さんのおばさんの場合、円卓七〇〇分の料理を出している。一卓一〇人計算であるから七〇〇人が飲食したことになる。ごく普通の村民でこのようなのである。名望家で資産家の范さんの葬儀では、数千人に食事を出した。私は葬儀に際して少額の香儀を出しているが、葬儀の間中、ずっと葬家で食事するのが常であつた。料理は専門の請負料理人が天幕の下の調理場で十数種の料理を次々に出し、円卓には、大人、子供が一杯座り、談笑しながら次々に料理をたいらげる様子は壯観である。

以前はこうした飲食を葬儀の時の他、週忌の時にも出したので費用が更にかかり田畑を売ることさえあつた。現在は、皆が香儀として現金をもつてくるようになり、(以前は弔旗のような布が多かつた)、香儀で葬儀がまかなえるようになったといつている。香儀を出すことは貯金のように

なものだと隣家のKさんは何時もいう。誰かの死をきくと必ず古い香儀簿をとり出し、以前香儀をもらつてあれば、必ずそれに見あつた額を持って行くのである。香儀は宗教上の問題であるが、長い時間の中で必ず収支が完結する互助のしくみのひとつなのである。J村の場合、日本の村の場合に比べ香儀持参者はかなり多いといえるだろう。

六、調査期間中は、出来るだけ各地の墓を見るようにしてきた。沖繩同様に複葬制であり、墓の形態も似たものが多いが、沖繩でよくみられる、死者の棺ときれいにした骨を入れたカメを同一墓室内に安置する方法はみられない。台湾の墓についてくわしく調査研究した平敷令治氏は、この併置型の存在を聞いている。しかし骨化しない前の死者は非常に恐れられていることから、どうも併置型はあつたとしても一般的ではないように思われる。J村の場合、お棺に入った死者は公共墓地の中の、地理師にみてもらつて良い場所に先ず埋葬される。厚い木で作られた棺には、土がかげられ、その上に芝草を植えるが、墓地のあちらこちらに、こうしたカマボコ型の土盛が見られる。張さんが亡くなつて一年足らずたつた頃村をたづねた私は墓参りを申し出たが、余りよくないことだという。結局参ることは許されたが、線香をともしてはならないという。死後一年がたたない死者霊は線香をともして呼び出してはいけないの

である。墓地に行ってみると草ぼうぼうで墓参りした様子はなく、案内役のKさんにも仲々わからない位である。一年たつと霊能者をよんで死者の言葉をよびだしてきく。

三年たつと専門家にたのんで（沖縄では親族、特に女性を骨を洗う）棺を掘だし拾骨し一定順序でカメに納める。役目のすんだ木棺はそこらにほうり出される。まだしっかりしている木棺の一部は溝の橋につかわれたりする。拾骨の様子は、私の見た例では、特に厳肅な雰囲気はなく、親族たちは近くで煙草をのみながら拾骨のすむのを待つというふうであった。拾骨されたカメはすぐ墓に入れるわけではない。墓のあく良い日を待つのである。墓地を歩いてみると墓入りを待つカメがあちらこちらに並んでいるがみうけられる。

位牌の方もすぐ正庁の祖先とともに祀られるわけではない。J村では三年間は死者の名前を書いた紙片の入った赤い小さな袋が竹籠に入れられ、壁につるさげられる。張さんの香籠も正庁のむかつて左側の壁にさげられ祭祀されているのを見た。

死者は、骨になった状態になるとかなり簡単にあつかわれ、墓地にむき出しのカメがたくさん並んでいるように、余り恐れられ、忌避されている様子は無い。やがて良い日さえらんで、墓に納められるが、墓の規模は様々である。J村でこの二十年位前から流行しているのは、一ヶ所に一

族のカメを納める大きな塔といわれる墓を作ることである。墓を作る土地が得にくくなってきた事情と共に、一ヶ所におさめて墓参を便利にしたいことや、また何より立派な墓を持ちたいとする考えがある。公共墓地の場合は塔を作る為の土地の広さの制限があるが、私からみれば大きなものがたくさん作られている。張一族の場合もこれまでの塔がせまくなったので千箇近く入る大きな塔につくりかえた。内部は階段状になっていて世代によって安置される場所がきまっている。私有地の墓地の中には、立派な門、人が休息する亭、美しい庭園などをもった死者達の巨大なそして美麗な住居には目を見はるばかりのものがある。

七、廟の中で非常に興味深いのは、人骨をまつるものがあることである。台湾全地域に有応公廟、萬善祠、聖公廟、聖媽廟、百姓廟、大衆廟など様々の名称でよばれる枯骨をまつる廟が非常に多くあり、人々の熱心な信仰の対象となっている。J村には萬善祠とよばれる小祠が一祠あるのみであったが、台湾中部彰化県の鹿港では、狭い市内に二十八ヶ所も枯骨をまつる廟があったのには驚かされた。小祠が多いが中には、康熙年間に創建つたえ三殿をかまえる立派な廟に成長したものもある。戦争、疾病、天災、一族の衰亡、都市の拡大など枯骨をうみ出す原因は無限にあるのだ。

廟には、枯骨を入れたカメを安置したものが多く。こうした廟は祈ればこたえてくれるとして人々の信仰をうけている。特に賭博の勝利や縁談の祈願などに靈顯があるとされ、祈願がききいられると御札に芝居を供えることが多い。現在は手軽な映画を上映している。ききめのある廟の場合は、何ヶ月も芝居や映画が続くのである。人々の神々の世界で、最上の神は玉皇上帝（天公）であるが、このような偉い神には余り身近なお願いはできない。下級の神にこそ祈願できるのである。彰化市に天清觀という天公をまつる古廟があり、十数年前ここを訪れた時は、觀とは名ばかりの誠にさびれた廟であったが、今年再び訪れてみると行政の手によって歴史的建造物再建ということで立派になっていたが、信者の熱意によらない再建ということ、天公という最上神への祈願とご利益という問題であるかもしれない。

何故由緒不明の骨が神的存在に昇格するのか。漢人社会の神々の世界は、中国古代王朝の官僚組織や軍隊の投影として考えられている。その神々の殆どは人に由来するものである。つまり偉人、聖人、英雄、靈力秀れた人の魂や、そして枯骨でさえ天帝や人帝或は人々にみとめられれば神となるのである。丁村の隣にある大廟は、清朝の頃、官軍をたすけて反乱匪賊とたたかって死んだ人の遺骨をまつたもので、村の人は、皇帝（清朝乾隆帝のこと）をさしてい

る）がみとめてくれたので位があがったが、やっぱり鬼であるから銀紙をやくのだという。台湾では一般に死者には銀紙、神々には金紙を写真として焼くのである。しかしありがたい神になったのだからと金紙をやく人もある。枯骨に由来する神々は、下位に属し、その持っている曖昧性は興味深い神々の世界のありようを示している。

村では毎月一日、十五日（農曆）に最も身近の神である土地公祠の拝々がある。張さんの家のそばの土地公祠は、広々として水田のほとりにあり、如何にも稲作農民を守護する土地神といった風情がある。人々は供物を供え、しばし神が食べる時間を待って水田を眺める。新竹名物の強い風にそなえて、水田のまわりは竹林でかまれば独特の風景をつくっている。

村の方々の限りない親切なご指示によって今迄いくつかの論文を書くことができ、今も書いている。これからも苦しくもまた楽しい基本としての野外調査は続くようである。このような長期にわたる調査研究には、跡見学園女子大学、高橋経済研究所、庭野平和財団、私学研修福祉協会などの研究助成による研究がふくまれている。記して感謝を表したい。

（うえまつ あかし・民俗学）

植松明石先生

【略歴】

- 一九三三年九月二三日 沼津市生まれ  
一九五八年三月 慶応義塾大学文学部史学科卒業  
一九七四年四月 跡見学園女子大学専任講師  
一九七七年四月 同大学助教授  
一九八一年四月 同大学教授  
一九九四年三月 同大学定年退職

【主要な著作】

- 『沖繩の社会と宗教』（共著、平凡社、一九六五年）  
『叢書わが沖繩 村落共同体』（共著、木耳社、一九七一年）  
『日本民俗学のエッセンス』（編著、ぺりかん社、一九七九年）  
『環中国海の民俗と文化？ 神々の祭祀』（編著、凱風社、一九九一年）



渡部 武先生

【略歴】

- 一九三三年一月一六日 東京生まれ  
一九四九年九月 東京大学文学部倫理学科卒業  
一九五一年九月 東京大学文学部大学院（旧制）退学  
一九七四年四月 跡見学園女子大学助教授  
一九七八年四月 同大学教授  
一九九四年三月 同大学定年退職

【主要な著作】

- 『中江藤樹』（清水書院、一九七四年）  
『よくわかる社会思想』（エール出版社、一九七七年）  
『現代に立つ思想家』（共著、現代文化社、一九七二年）  
『新版道徳教育の研究』（共著、建帛社、一九七五年）  
『日本思想論争史』（共著、ぺりかん社、一九七九年）

